

[資料]

大学生のLGBTに関する実態

羽田野 花 美¹* 多久島 寛 孝¹ 末 永 芳 子¹
大 坪 昌 喜¹ 岩 村 純 子¹

Survey report on university of health medical students regarding the LGBT
(Lesbian, Gay, Bisexual, and Transgender)

Hanami HADANO, Hirotaka TAKUSHIMA, Yoshiko SUENAGA,
Masaki OTSUBO, Junko IWAMURA

要旨

保健医療系の大学に在学している学生700名を対象に、LGBTに関する現状について無記名自己記入式質問紙調査を行い、以下の結果を得た。

1. 生物学的性と自認している性が異なる者は1名(0.1%)、自分の性別に違和感がある者は3名(0.4%)、以前はあったが今はない者は5名(0.7%)であった。また、性的指向では、同性愛者3名(0.4%)、両性愛者/全性愛者27名(3.9%)であり、約4%のLGBTの学生が修学していた。
2. LGBTについての認識は、「ある程度説明できる」147名(21.0%)、「詳しい方だと思う」22名(3.1%)であり、約25%は知識があると推測できたが、約50%は正確な理解や認識ができていない状況であった。
3. 大学生活の中でLGBTについて教職員の対応を含む大学側の対応として十分ではないと感じたり、不満に思うこととしては、「更衣室」177名(25.3%)、「トイレ」163名(23.3%)、「相談体制」98名(14.0%)などであった。
4. LGBTの学生に対して何らかの支援をしたいと思う学生およびLGBTに関する勉強会やサークルに参加したいと思う学生は、それぞれ324名(46.9%)であった。

LGBTの学生が適切な支援が受けられる環境を整えることが求められており、そのためには、学生・教職員を問わず、多様な性についての啓発が必要である。また、学生間の交流によってLGBTへの理解が深まるよう、サークル活動などへの支援が必要である。

キーワード：LGBT 性自認 性的指向 大学生 修学支援

I. 緒言

LGBTとは、レズビアン(Lesbian；女性同性愛者)、ゲイ(Gay；男性同性愛者)、バイセクシュア

ル(Bisexual；両性愛者)、トランスジェンダー(Transgender；こころの性とからだの性との不一致)の頭文字をとったもので、性的少数者(性的マイノリティ)の総称の一つである¹⁾。国や人種に関

所属

¹熊本保健科学大学保健科学部看護学科

*責任著者：羽田野花美 E-mail：hadano@kumamoto-hsu.ac.jp

係なく人口の4～10%程度が該当するとされており、本邦では約13人に1人と推定されている²⁾。LGBTのうち、「L」「G」「B」の三者は性的指向に関わる類型であり、「T」は性自認に関する類型である。

性的指向³⁾とは、人の恋愛・性愛がどういう対象に向かうのかを示す概念をいう。具体的には、恋愛・性愛の対象が異性に向かう異性愛（ヘテロセクシュアル）、同性に向かう同性愛（ホモセクシュアル）、男女両方に向かう両性愛（バイセクシュアル）を指す。同性愛者や両性愛者の人々は、少数派であるため正常と思われず、場合によっては職場を追われることもある。このような性的指向を理由とする差別的取扱いについては、現在では、不当なことであるという認識が広がっているが、いまだ偏見や差別が起きているのが現状である。性自認³⁾とは、自分の性をどのように認識しているか、どのような性のアイデンティティ（性同一性）を自分の感覚として持っているかを示す概念であり、「こころの性」と呼ばれることもある。多くの人は、性自認（こころの性）と生物学的な性（からだの性）が一致しているが、この両者が一致しないために違和感を感じたり、からだの性をこころの性に近づけるために身体の手術を通じて性の適合を望むことさえある（性同一性障害）。こうした人たちが、偏見の目を向けられたり、職場などで不適切な取扱いを受けたりすることがある。トランスジェンダーは性同一性障害と同一と解釈されることがあるが、性同一性障害とはあくまで医療的なケアが必要とされる場合の診断名であり、トランスジェンダーの中には自分の身体の性別に違和感（性別違和）を持つものの、特に医療的な治療を必要としない者もあり、トランスジェンダーのうち、性別適合手術（性別再指定手術）を受けて身体変更を行った者あるいは身体変更を望む者（トランスセクシュアル）の割合は20～30%にとどまっているとされる⁴⁾。そのほか、性的指向や性自認がはっきりしていない場合や、定まっていない、どちらかに決めたくないと感じるなど、特定の状況にあてはまらないQ（クエスチョニング）⁵⁾など、LGBTの分類に収まらない類型もある。そのため、SOGI（性的指向及び性自認：Sexual Orientation and Gender Identity）という表現が使用され始めている⁶⁾。本論文では、一般的に使用されている「LGBT」を用いることとする。

ところで、2015年の調査²⁾では、国内のLGBT

は7.6%（2012年5.2%）であった。LGBTの当事者である本人たちが悩みを語り合うだけでなく、当事者でない人とのつながりを広げていく活動も増えており、国内ではすでに50大学でLGBTサークルが活動している（2014年7月10日朝日新聞）。2014年6月に文部科学省は「学校における性同一性障害に係る対応に関する状況調査について」⁷⁾を公表し、その中で606事例を報告するなど学校教育の現場では大きな課題として取り上げられている。他の報告においても、いじめや暴力を受けたことがあるLGBTは68%⁸⁾、不登校を経験したことがある性同一性障害者は29.4%、自死念慮を抱いたことがある性同一性障害者は58.6%との指摘があり⁹⁾、同時に自死念慮が二次性徴期（小学校高学年～高等学校）に多いことから、大学入学前の児童生徒の大きな問題であることは明らかである。こうしたことから、LGBTに関する正しい知識の普及や支援体制を整えることの重要性も指摘されている³⁾。文部科学省の報告では、小・中学校における発達障害の児童生徒は100人中約6.5人¹⁰⁾とされている。国内のLGBTは100人中約7.6人²⁾であることを考えると、40人クラスの場合、3人くらいのLGBTの子どもがいると推測できる。

そのような中、大学では、発達障害の学生に対して、教職員を対象に研修会を行ったり、相談室を中心とした組織的・全学的な修学支援体制を整えるなど取り組みが進んでいる。一方、LGBTに関しては、大学や医療・看護現場における実態や取り組み等については明らかにされていない。2015年4月30日に文部科学省は「性同一性障害に係る児童生徒に対するきめ細やかな対応の実施等について」¹¹⁾の通知を出し、小・中・高等学校の児童生徒に対する取り組みが始まった。その通知では、心と体の性が一致しない性同一性障害の児童生徒に対する学校での対応例として、服装、髪、更衣室、トイレ、呼称の工夫、授業などでの配慮や支援の具体例を提示した。一方、大学における取り組みの詳細については把握できておらず、いまだ取り組みそのものが進んでいないのが現状である¹²⁾。今後、小・中・高等学校での取り組みが進むことを考慮すれば、大学教育における取り組みは喫緊の課題であるといえる。

そこで、本研究では、大学におけるLGBTの現状や問題を明らかにし、修学や就職等LGBTへの支援に関する課題や方法を検討するため、医療系大

学の学生を対象に実態調査を行った。

Ⅱ 方法

1. 対象

保健医療系のA大学の学部生1,397名。

2. 調査方法

調査には無記名自己記入式質問紙法を用い、質問紙の配付は直接あるいは対象者が所属する学科の教員の協力を得て行った。回収は、質問紙に添付した返信用封筒による郵送法にて行った。

3. 調査内容

(1) 性別（身体的・生物学的・戸籍上）、(2) 自認している（感じている）性別、(3) 性別（生物学的）への違和感の有無とある場合は違和感をもち始めた時期、(4) 自分をトランスジェンダー（心と体の性が一致しない）と思うか、(5) 自分の性別に違和感があることや心と体の性が一致しないことについて打ち明けたり相談したりしたことがあるか、ある場合はその相手、ない場合はその理由、(6) 性的指向（恋愛や性愛の対象となる相手の性別）、(7) 同性愛者や両性愛者などであることについて打ち明けたり相談したりしたことがあるか、ある場合はその相手、ない場合はその理由、(8) LGBTについての認識（① LGBTということばについて、②まわりに同性愛者や両性愛者がいるか、③まわりに心と体の性が一致しない人がいるか、④同性愛者や両性愛者であることをカミングアウトされたことがあるか、⑤心と体の性が一致しないことをカミングアウトされたことがあるか）、(9) 大学生活の中でLGBTに

ついて大学側の対応（教職員の対応を含む）として十分ではないと感じたり、不満に思うこと（複数回答）、(10) LGBTの学生に対する支援やLGBTに関する勉強会・サークルへの参加について、である。

4. 分析方法

項目ごとに記述統計を行った。

5. 倫理的配慮

調査は、研究者が所属する大学の「人を対象とする医学系研究に関する倫理審査」を受け、承認を得たうえで実施した（承認番号：2016-40）。

対象者に対しては、研究の目的および趣旨、参加は任意であること、回答は無記名のため個人が特定されることはなくプライバシーは保護されること、データは統計的に処理するとともに研究目的以外には使用しないこと、協力の有無に関わらず不利益を生じることはないこと、調査結果は学会や論文での公表を予定していること、質問紙の回答および返送をもって同意とみなすこと等について、口頭および文書で説明した。調査協力への同意は、質問紙の回収をもって得られたものとした。

Ⅲ. 結果

質問紙は700名から回収された（回収率50.1%）。

1. 生物学的性と自認している性

生物学的性は、「女性」541名（77.3%）、「男性」159名（22.7%）であり、自認している性は、「女性」540名（77.1%）、「男性」159名（22.7%）、「両方」1名（0.1%）であった（図1）。

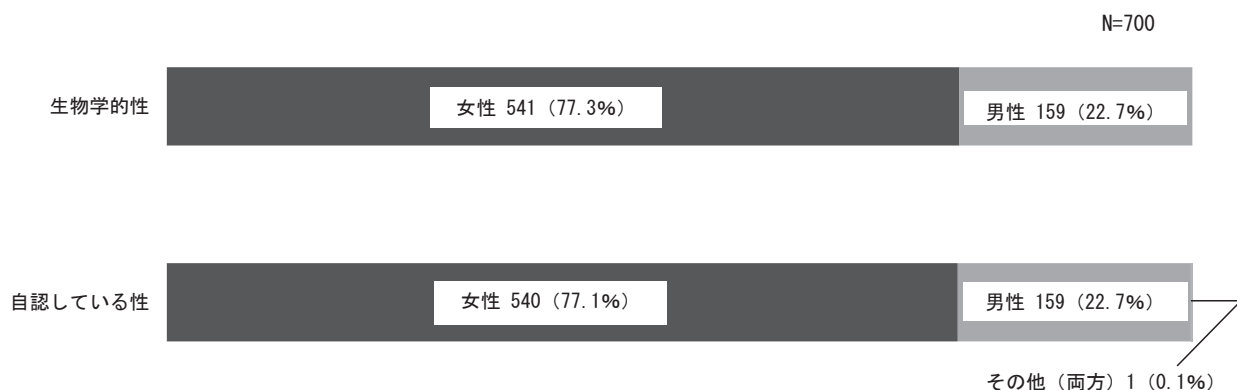


図1 生物学的性と自認している性

2. 性別（生物学的）への違和感

性別（生物学的）への違和感が「ある」は3名（0.4%）,「以前はあったが今はない」5名（0.7%）で（図2）,違和感をもち始めた時期は,「大学生以降」4名（50.0%）,「高校生」1名（12.5%）,「中学生」2名（25.0%）,「小学校入学前」1名（12.5%）であった（図3）。また,自分をトランスジェンダー（心の性と体の性が一致しない）と「思う」はなく,「思わない」4名（50.0%）,「わからない」4名（50.0%）,「わからない」28名（3.7%）であった（図4）。

4名（50.0%）であった（図4）。また,自分の性別に違和感があることや心と体の性が一致しないことについて打ち明けたり,相談したりしたことの有無については無回答であった。

3. 性的指向

性的指向は,「異性愛者」642名（92.0%）,「両性愛者/全性愛者」27名（3.9%）,「同性愛者」3名（0.4%）,「わからない」28名（3.7%）であった（図5）。

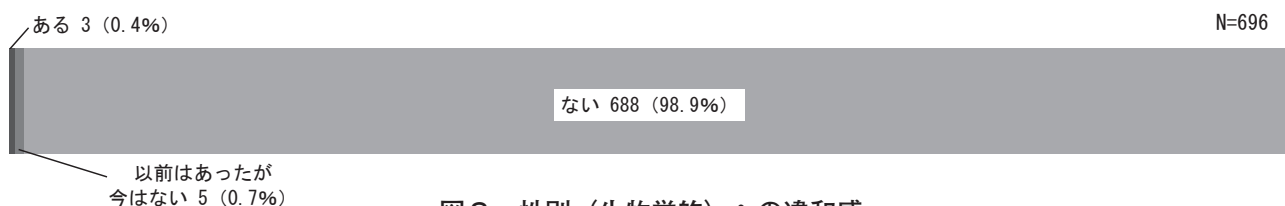


図2 性別（生物学的）への違和感



図3 違和感をもち始めた時期



* 思う 0

図4 自分をトランスジェンダー（心の性と体の性が一致しない）と思うか

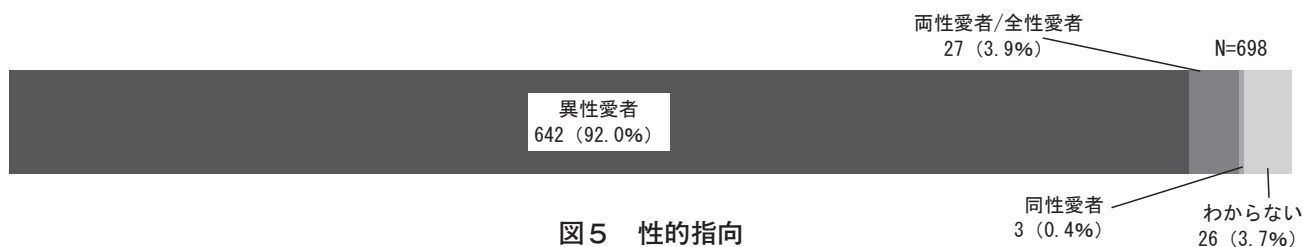


図5 性的指向



図6 同性愛者や両性愛者などであることを打ち明けたり, 相談したことの有無

5)。このうち、同性愛者や両性愛者などであることを打ち明けたり、相談したことがある者は18名(62.1%)で(図6), その相手(複数回答)は、「学外の友人や仲間」12名(66.7%), 「クラスメイト」8名(44.8%), 「部活やサークルの仲間」3名(16.7%), 「きょうだい」2名(11.1%)等であった(図7)。

また、同性愛者や両性愛者などであることを打ち明けたり、相談しなかった理由(複数回答)としては、「必要を感じなかった」11名(100%), 「どう話したらよいかわからなかった」「わかってもらえないのではないかと考えた」「理解してもらえないか不安だった」「話すことで差別や偏見を受けるのではないかと考えた」がそれぞれ1名(9.1%)であった(図8)。

4. LGBT についての認識

LGBT ということばについては、「はじめて聞いた」325名(46.4%), 「聞いたことはあるが、意味はわからない」41名(5.9%), 「なんとなくわかる」165名(23.6%), 「ある程度説明できる」147名(21.0%), 「詳しい方だと思う」22名(3.1%)であっ

た(図9)。「まわり(クラスメイトやサークル仲間・身内など)に同性愛者や両性愛者がいるか」については、「いる」112名(16.0%), 「いない」315名(45.1%), 「わからない」272名(38.9%)であった(図10)。また、「まわり(クラスメイトやサークル仲間・身内など)に心と体の性が一致しない人(トランスジェンダーや性同一性障害)がいるか」については、「いる」46名(6.0%), 「いない」352名(50.4%), 「わからない」304名(43.6%)であった(図11)。「同性愛者や両性愛者であることを、カミングアウトされた(打ち明けられた)ことがあるか」については、「ある」75名(10.8%), 「ない」620名(89.2%)であった(図12)。また、「心と体の性が一致しない(トランスジェンダーや性同一性障害である)ことを、カミングアウトされた(打ち明けられた)ことがあるか」については、「ある」30名(4.4%), 「ない」654名(95.6%)であった(図13)。

5. 大学生活の中で LGBT について大学側の対応(教職員の対応を含む)として十分ではないと感じたり、不満に思うこと(複数回答)

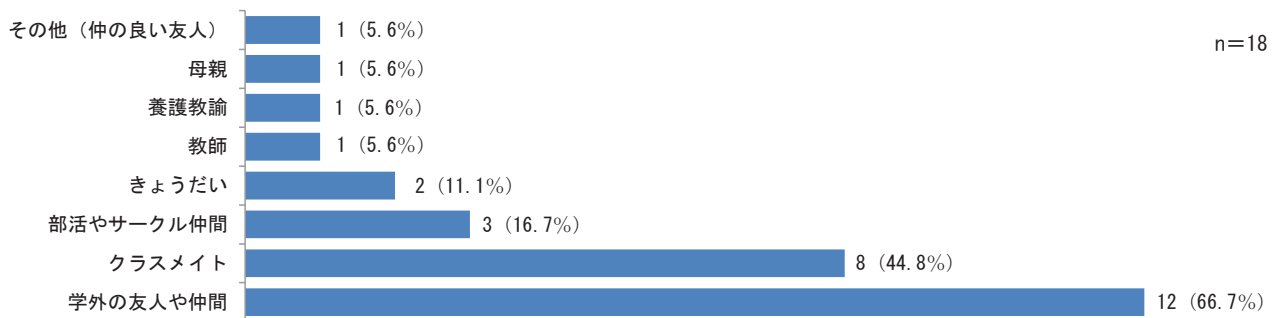


図7 同性愛者や両性愛者などであることを打ち明けたり、相談した相手(複数回答)

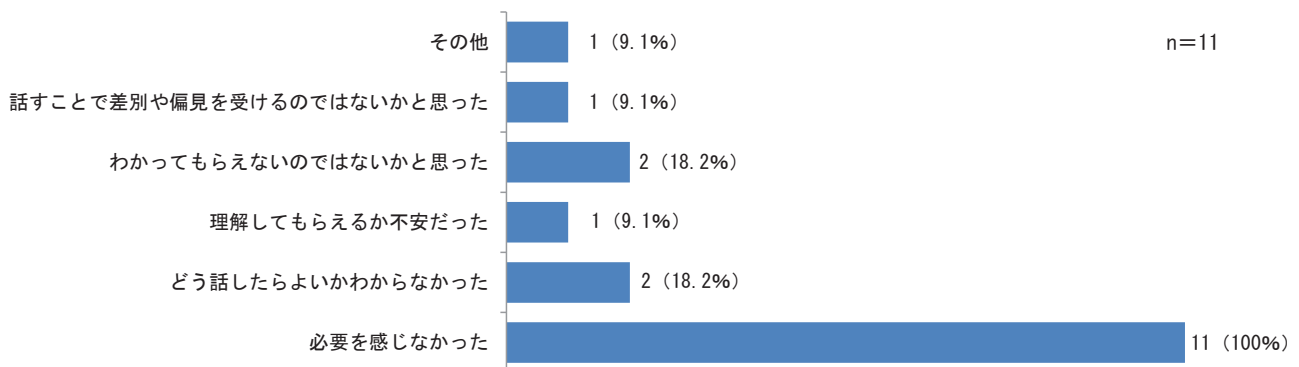


図8 同性愛者や両性愛者などであることを打ち明けたり、相談しなかった理由(複数回答)

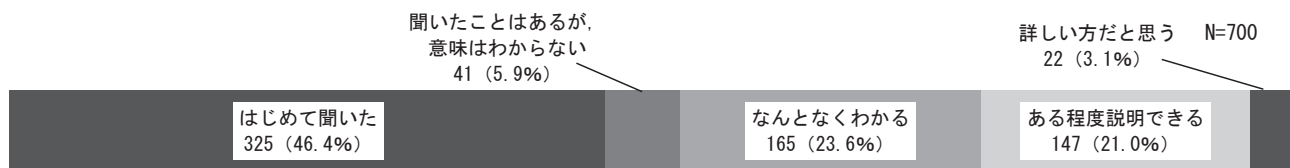


図9 LGBT ということばについて



図10 まわり（クラスメイトやサークル仲間・身内など）に，同性愛者や両性愛者がいるか



図11 まわり（クラスメイトやサークル仲間・身内など）に，心と体の性が一致していない人（トランスジェンダーや性同一性障害）がいるか

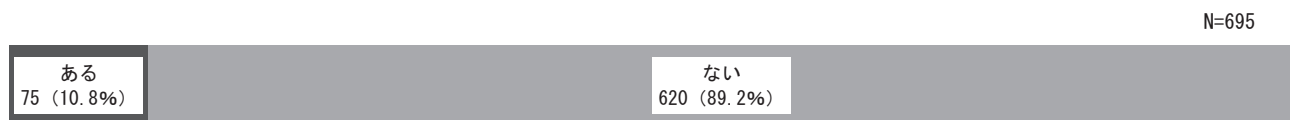


図12 同性愛者や両性愛者であることを，カミングアウトされた（打ち明けられた）ことの有無

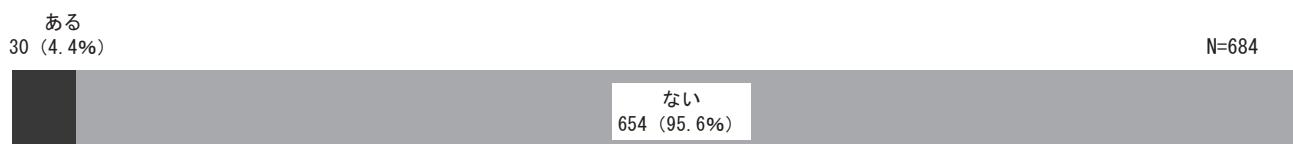


図13 心と体の性が一致しない（トランスジェンダーや性同一性障害である）ことを，カミングアウトされた（打ち明けられた）ことの有無

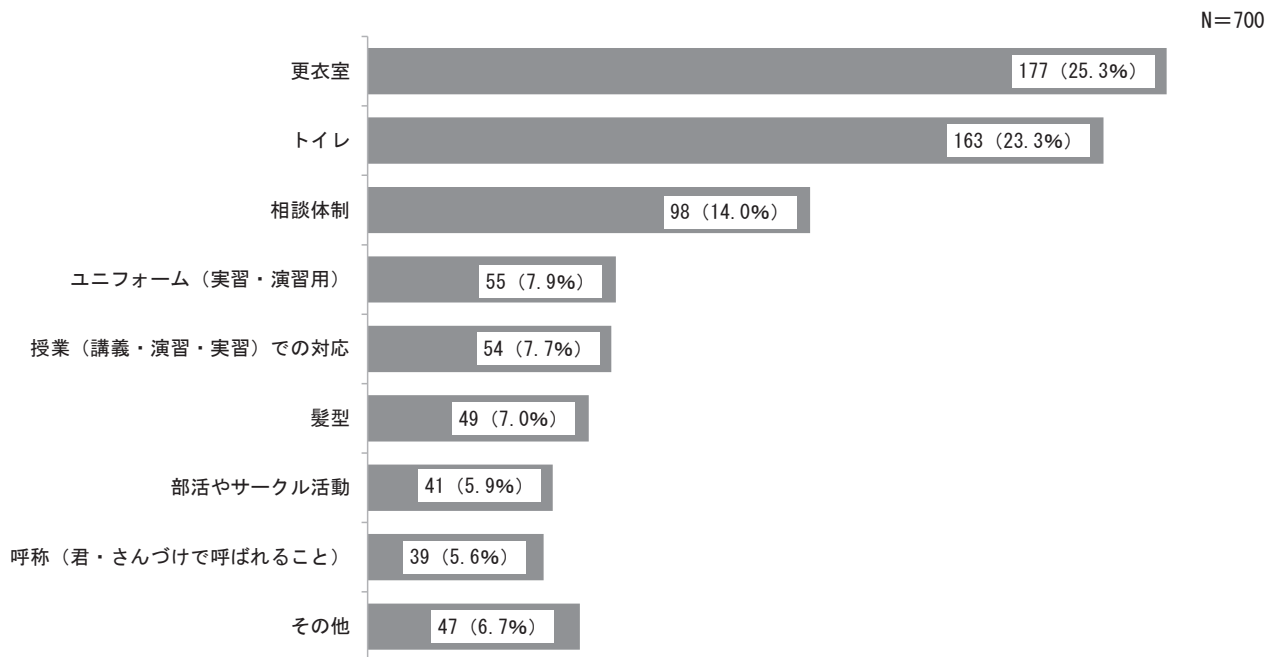


図14 大学生活の中でLGBTについて、大学側の対応（教職員の対応を含む）として十分ではないと感じたり、不満に思うこと（複数回答）

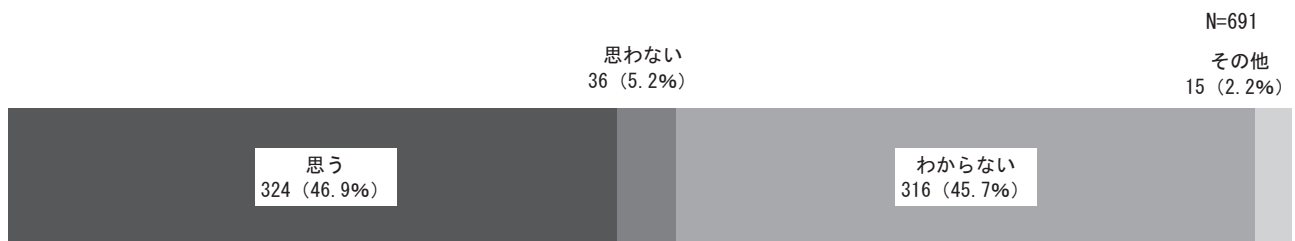


図15 まわりにLGBTの学生がいる場合、何らかの支援をしたいと思うか

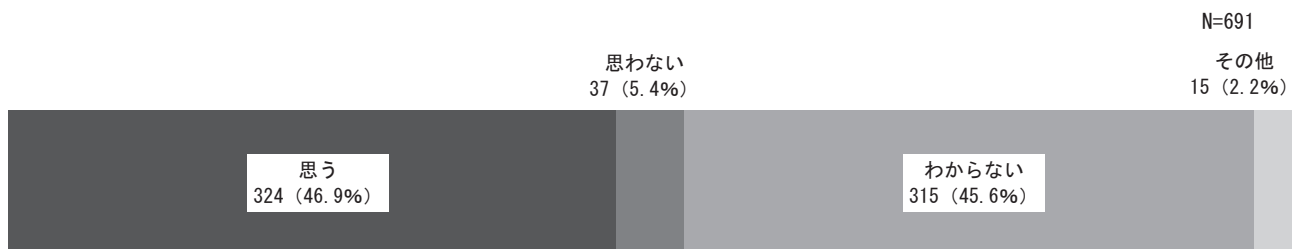


図16 LGBTに関する勉強会やサークルに参加したいと思うか

「更衣室」177名 (25.3%), 「トイレ」163名 (23.3%), 「相談体制」98名 (14.0%), ユニフォーム (実習・演習用) 55名 (7.9%), 授業 (講義・演習・実習) での対応54名 (7.7%), 髪型49名 (7.0%) 等であった (図14)。

6. LGBTの学生に対する支援やLGBTに関する勉強会・サークルへの参加について

1) まわりにLGBTの学生がいる場合、なんらかの支援をしたい

「思う」324名 (46.9%), 「思わない」36名 (5.2%), 「わからない」316名 (45.7%), 「その他」15名 (2.2%) であった (図15)。

2) LGBTに関する勉強会やサークルに参加したい

「思う」324名 (46.9%), 「思わない」37名 (5.4%), 「わからない」315名 (45.6%), 「その他」15名 (2.2%) であった (図16)。

Ⅳ. 考察

A大学の学生においては、生物学的性と自認している性が異なる者は1名 (0.1%), 自分の性別に違和感がある者は3名 (0.4%), 以前はあったが今はない者が5名 (0.7%) であった。また、性的指向では、同性愛者が3名 (0.4%), 両性愛者/全性愛者27名 (3.9%) であった。これらのことから、A大学では約4%のLGBTの学生が修学していることが明らかになった。薬師¹³⁾は、教育現場で性的マイノリティの子どもが困りやすいこととして、「男女で分けられること」「『いないこと』になっていること」「正しい知識にアクセスできないこと」「身近に相談できる人がいないこと」「自分の生きていく姿が思い描きにくいこと」を示している。また、LGBTであるかどうかは見た目だけでは判断できないことから、みんながセクシュアルマジョリティだという前提ではなく、異性を好きにならなかったり、性別に違和感をもっていたりする者がクラスにいることを念頭におくことが大切であると指摘している。A大学において、LGBTの学生は約4%と少数であったことから、孤立しやすい状況であるといえ、多様な性について学生・教職員を問わず啓発が必要であり、LGBTの学生が適切な支援が受けられる環境を整えることが必要であるといえる。

中塚¹⁴⁾は、性同一障害の子どもの現実として、子どもの頃の「封じ込める」体験を指摘している。すなわち、性同一性障害の子どもは、「自分がどのような存在かわからない」「誰にもわかってもらえない」と感じていることが多いにもかかわらず、周囲がそのつらさに気づいていない場合が多く、性的マイノリティや性同一性障害について否定的な言動をしていることがあることや、テレビなどのマスメディアの中に否定的な言動があふれている中で、自分自身を否定されていると感じ、性同一性障害の子どもには「自分はおかしい」「こんな自分が嫌い」というように、「トランスフォビア (嫌悪感) の内在化」「自尊感情の低下」が起きるとしている。また、10~35歳を対象とした調査⁸⁾でも、小学生から高校生の間に自分自身がLGBTであることを話さなかった理由として、「理解されるか不安だった」「話すといじめや差別を受けそうだった」「どう話していいかわからなかった」がそれぞれ5~6割を占めていた。さらに、小学校から高校時代に、LGBTをネタとした冗談やからかいを見聞きした経験がある者は84%であった。本調査でも、約4割は同性愛者や両性愛者などであることを、だれかに打ち明けたり、相談したことがなく、その理由としては、全員が「必要を感じなかった」と回答していたが、「どう話したらよいかかわからなかった」「わかってもらえないのではないかと思った」がそれぞれ18.2%, 「理解してもらえないか不安だった」「話すことで差別や偏見を受けるのではないかと思った」がそれぞれ9.1%であった。また、カミングアウトされた (打ち明けられた) 経験のある者は、同性愛者や両性愛者から10.8%, 心と体の性が一致しない者からは4.4%であった。これらのことから、まわりの無理解や偏見が、LGBTの生き辛さや孤立化の大きな要因になっているといえる。したがって、悩みを話しやすい環境を整えるとともに、相談してきたときには正確な知識に基づき、専門家と連携して支援することが求められていると考える。

LGBTということばについては、「ある程度説明できる」21.0%, 「詳しい方だと思う」3.1%であったことから、約25%は知識があると推測できる。しかし、「はじめて聞いた」「聞いたことはあるが意味はわからない」が合わせて52.3%であったことから、約半数は正確な理解や認識ができていない状況であるといえる。渡辺¹⁵⁾によると、子どもたちは、幼い

頃から「ホモ」「オカマ」「オネエ」が差別や「笑い」の対象だということを知っていて、いじめやからかいなどの差別行為をしているとしている。また、約半数の中学・高校生は、「ホモネタ」「オカマネタ」をメディアや友達との会話で見聞きして笑った経験がある一方で、「性同一性障害」と「同性愛」の違いについて説明できず、身体の性別に違和感をもたない「シスジェンダー」という言葉を知らない、「異性愛」という言葉を聞いたことがないとしている。また、渡辺¹⁵⁾は、「性的マジョリティ」が不問に付され、「性的マイノリティ」や「LGBT」だけが問われ、説明され、マジョリティに「理解」され「受け入れ」られるという構造を問うべきだとも指摘している。約半数の学生がLGBTについて正確に認識できていない状況をふまえると、単に「性的マイノリティ」「人権教育」ということだけではなく、「性の多様性」についての教育をどのように考えていくべきかが問われていると考える。

大学生活の中でLGBTについて大学の対応として十分ではないと感じたり、不満に思うこととして、「更衣室」25.3%、「トイレ」23.3%、「相談体制」14.0%、「ユニフォーム（実習・演習用）」7.9%、「授業（講義・実習・演習用）」での対応7.7%、などがあがった。いずれも、当事者では解決できない内容である。河嶋¹⁶⁾は、性的指向・性自認が非典型の学生を支援するための課題への対応策として、性自認に関するものは、設備面での配慮、通称名使用や希望する性別による配慮あるいは個別的配慮に関する課題、専門的知識を有するカウンセラーの相談室への配属、当事者サークルの開設などをあげている。また性的指向に関するものは、専門的知識を有するカウンセラーの相談室への配属、当事者サークルの開設などをあげている。文部科学省の通達¹¹⁾にあるように、個々人のニーズに応じた細かい配慮が必要とされているといえる。

LGBTの学生に対する支援やLGBTに関する勉強会・サークルへの参加については、約半数の学生が、何らかの支援をしたいあるいは勉強会やサークルに参加したいと回答していた。河嶋¹⁷⁾は、全国的性的マイノリティの学生サークルは、①交流型、②研究型、③アクション型の3型があるとし、このうち交流型が最も多く、研究型とアクション型は少ないと示した。また、アクション型のサークルは社会啓発活動を行っているが、大学に対して性的マイノ

リティへの支援を充実させる要請活動を行っているサークルは少ないことを示した。さらに、「アクション」型が少ないのは、差別や偏見があり、当事者が学内でカミングアウトしてソーシャルアクションを起こすような活動をするのがむずかしいからだとし、アライ（ALLY：LGBTなどの当事者ではないが、性的マイノリティを理解して支援する考え方）の学生が増え、LGBTに配慮した言動をする人が多くなることで、当事者の学生はカミングアウトしやすくなると指摘している。また、性的指向や性自認が非典型の学生たちがかかえる問題は、当事者だけの問題ではなく、性の多様性を無視した社会のありようを当たり前とみなし、それらを支えているマジョリティ側の問題でもあると指摘し、大学でのアライの存在意義は大きいとしている。今回、約半数の学生が何らかの支援をしたい、勉強会やサークルに参加したいと回答していたことから、アライの学生が増える要素はあるといえる。LGBTの学生との交流によって、性的指向や性自認が非典型である人への理解を深めていこうとする活動につながるよう、大学側の支援が必要とされており、また、そのあり方も問われているといえる。

V. 結語

1. 生物学的性と自認している性が異なる者は1名（0.1%）、自分の性別に違和感がある者は3名（0.4%）、以前はあったが今はない者は5名（0.7%）であった。また、性的指向では、同性愛者3名（0.4%）、両性愛者／全性愛者27名（3.9%）であり、約4%のLGBTの学生が修学していた。
2. LGBTについての認識は、「ある程度説明できる」147名（21.0%）、「詳しい方だと思う」22名（3.1%）であり、約25%は知識があると推測できたが、約50%は正確な理解や認識ができていない状況であった。
3. 大学生活の中でLGBTについて教職員の対応を含む大学側の対応として十分ではないと感じたり、不満に思うこととしては、「更衣室」177名（25.3%）、「トイレ」163名（23.3%）、「相談体制」98名（14.0%）などであった。
4. LGBTの学生に対して何らかの支援をしたいと思う学生は324名（46.9%）で、LGBTに関する勉強会やサークルに参加したいと思う学生は324

名（46.9％）であった。

大学には、LGBT の学生が適切な支援が受けられる環境を整えることが求められており、そのためには、学生・教職員を問わず、多様な性についての啓発が必要である。また、学生間の交流によってLGBT への理解が深まるよう、サークル活動などへの支援が必要である。

謝辞

調査にご協力いただきました学生のみなさまに感謝いたします。

なお、本研究は、平成28年度熊本保健科学大学学内研究費の助成を受けたものの一部であり、その要旨は第37回日本看護科学学会学術集会で発表した。

利益相反

本研究における利益相反は存在しない。

文献

- 1) 針間克己：LGBT と精神医学．精神科治療学31 (8)．967-971, 2016.
- 2) 電通総研調査（2012年・2015年）
- 3) 法務省「性の多様性について考える」（http://www.moj.go.jp/JINKEN/jinken04_00126.html）[2018.8.20アクセス]
- 4) 三成美保：教育でのLGBT の権利保障の課題．三成美保編集，教育とLGBTIをつなぐ 学校・大学の現場から考える，第1版，青弓社，p21, 2017.
- 5) 中塚幹也：LGBTI 当事者ケアに向けた学校と医療施設との連携．三成美保編集，教育とLGBTIをつなぐ 学校・大学の現場から考える，第1版，青弓社，pp76-78, 2017.
- 6) 谷口洋幸：LGBT/SOGI に関する包括的な法整備の必要性．三成美保編集，教育とLGBTIをつなぐ 学校・大学の現場から考える，第1版，青弓社，pp112-114, 2017.
- 7) 文部科学省：「学校における性同一性障害に係る対応に関する状況調査について」2014年6月13日（http://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/micro_detail/__icsFiles/afielddfile/2016/06/02/1322368_01.pdf）[2018.8.20アクセス]
- 8) いのちリスペクト．ホワイトリボンキャンペーン：「LGBT の学校生活に関する実態調査（2013）結果報告書」2013年度東京都地域自殺対策緊急強化補助事業．2014.（<http://www.endomameta.com/schoolreport.pdf>）[2018.8.20アクセス]
- 9) 前掲5）pp89-90.
- 10) 文部科学省初等中等教育局特別支援教育課：「通常の学級に在籍する発達障害の可能性のある特別な教育的支援を必要とする児童生徒に関する調査結果について」2012年12月5日（http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/tokubetu/material/__icsFiles/afieldfile/2012/12/10/1328729_01.pdf）[2018.8.20アクセス]
- 11) 文部科学省：「性同一性障害に係る児童生徒に対するきめ細やかな対応の実施等について」2015年4月30日（http://www.mext.go.jp/b_menu/houdou/27/04/1357468）[2018.8.20アクセス]
- 12) 河嶋静代：大学での性的指向と性自認が非典型の学生支援の課題，三成美保編集，教育とLGBTIをつなぐ 学校・大学の現場から考える，第1版，青弓社，pp214-215, 2017.
- 13) 薬師実芳：多様な性をもつ子どもの現状と教育現場で求められる対応について．三成美保編集，教育とLGBTIをつなぐ 学校・大学の現場から考える，第1版，青弓社，pp123-127, 2017.
- 14) 前掲5）pp90-91.
- 15) 渡辺大輔：「性の多様性」教育の方法と課題．三成美保編集，教育とLGBTIをつなぐ 学校・大学の現場から考える，第1版，青弓社，pp159-161, 2017.
- 16) 前掲12）p217.
- 17) 前掲12）pp219-220.

（平成30年10月12日受理）